

俳句

一 華開五葉（自然に成る）

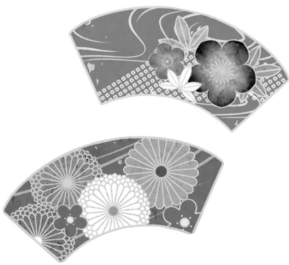
松枝 勝一（高6回）

書初や己の見えし一文字
故郷を偲びて観るや雪椿
大仏に春立つ風を入れにけり
紙風船つくたび窪み空にあり
五月雨や峽に舒す山くずれ
麦秋や名画の如き陽が沈む
白蓮夕日あたりて如来像
秋めくや夕日の岬鳶の笛
さざ波やいとしき砂の秋の浜
賓頭盧を撫でて身弱や実南天
夕明りまとふ紅葉や光堂
凍滝の封じ込めたる水の音
阿修羅の憂へる顔や年の暮

春の闇

山崎美恵子（高21回）

春の夜や人形の胸ときめきぬ（友人の人形展）
春の闇巴里の女の黒き服
モジリアニの首長き人しゃぼん玉
鯉のぼり風吹かぬ日は立ち泳ぎ
紫陽花や揺れて止まざる恋心
夏野行く我が口笛に追ひつけず
黄揚羽の黄色横切る真昼かな
サーカスのテントの裏の木下闇
夜店の灯とところどころに闇を置き
騙し絵のごとき女よパリー祭
遠ざかるモンローウォーク夏の果て
描かれし空ひとつなり原爆忌
脱ぎ捨てし皮手袋のうごめきぬ



哭こく

真理子シヤイフェレ(高21回)

逝なきてな お光 求めて海を越ゆ

わが師 彷徨さまようアポロンの島

生木なまき さえかくあるものを枯木はと

師の問い深く今も響ひびきて

自みづからに出撃命令下くだしいて

父は波濤に闇を追おいたり

「震洋」の波間に揺ゆらぐ映像を

声なく見入る特攻艇ゆえ

悲しみの測はかりがたきを織おり込こめて

泥藍どろあの絹うは海色うみいろの青

妹いもよ独ひとりで逝なくなと慟なげ哭なす

賢治の悲しみ昇ありゆく空

白銀しろがねの光宿ひかりせるあめゆきに

触ふれたる妹いもの微笑ええみ清あらなり



短歌